

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 4章7～18節

7ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。8わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、9虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。10わたしたちは、いつもイエスの死を体にまどっています、イエスの命がこの体に現れるために。11わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。12こうして、わたしたちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いていることになります。13「わたしは信じた。それで、わたしは語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じ、それだからこそ語ってもいます。14主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。15すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

16だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。17わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。18わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 20章19～31節

19その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。21イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」22そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。23だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

24十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。25そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れて

みなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」<sup>26</sup>さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。<sup>27</sup>それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」<sup>28</sup>トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。<sup>29</sup>イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

<sup>30</sup>このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。<sup>31</sup>これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

### 「平和があるように」【こども説教のために】

教会は、「イースター（復活祭）」の祝いから八日目を迎えました。「イースター」に続く日曜日です。この日も、教会は、主イエスのご復活を記念して祝います。この日だけでなく、八日目ごとの日曜日に、主イエスのご復活を記念して祝い続けます。毎週が小さな「イースター」なのです。

最初のイースターの日、主イエスの墓が空になっていることを見つけたのは、女の弟子たちでした。その日、男の弟子たちのほとんどは、一つの家に集まり、閉じこもっていました。主イエスが捕らえられて十字架につけられたように、自分たちも捕らえられるのではないかと、不安だったのかもしれませんが、**自分たちのいる家の戸に鍵をかけて、だれも勝手に入って来られないように**していました。

ところが、その弟子たちの真ん中に、突然お立ちになる方がありました。「あなたがたに平和があるように」と言われ、ご自身の手とわき腹につけられた傷をお見せになったのです。弟子たちは、その方が主イエスだと気づきました。彼らの間に、主イエスがご復活なさって現れてくださったのです。

そのとき、一緒にいなかった弟子がありました。トマスです。ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言っても、トマスは信じません。「その傷跡を見て、指を入れてみなければ、手を入れてみなければ、信じない」と。

それから八日目、弟子たちの集まっている家に、トマスもいました。その日も、入口は閉ざされていました。けれども、その真ん中にお立ちになる方がありました。「あなたがたに平和があるように」と告げるお方、主イエスでした。その手とわき腹の傷をお見せくださったとき、トマスは言いました、「わが主よ、わが神よ」。トマスはご復活の主を信じたのです。

## 「わたしたちは主を見た」

主のご復活を祝った「イースター」から一週間。わたしたちは、再び、ご復活の主イエスを真ん中にお迎えするために、ここに集められて来ました。あの、一つの家が集まっていた弟子たちと同じように。

弟子たちは、女の弟子たちのように空の墓を見てはいなかったかもしれませんが。けれども、報告は聞いていました。十字架につけられ、手を釘打たれ、わき腹を槍で突かれ、そして息絶えられた主イエスの御体は、墓の中から無くなっているとすれば、どこにあるのかと、疑問に思ったことでしょう。

主イエスの御体を捜しに行こうとは思わなかったのでしょうか。弟子のペトロともう一人の弟子は、墓を確かめに行ったと伝えられていますが、他の弟子たちはどうしたのでしょうか。どうやら、ほとんどの者は、主イエスの御体を捜しに行こうとはせずに、家に閉じこもっていたのです。捜し出したとしても、主イエスはすでに死んだお方なのです。死んだお方の御体を捜し出して、あらためて墓にお納めすることも大切ですが、周囲から何を言われるか分かりません。主イエスの御体を十字架の上から引き取って墓に納めた人、アリマタヤのヨセフとニコデモがいるのですから、今は、彼らに任せておくべきだと考えたとすれば、賢明なことです。

本当のことを言えば、彼ら弟子たちは、主イエスが捕らえられてからずっと、近づこうとしていなかったのです。ペトロともう一人の弟子だけは、主イエスが最初に連れて行かれた大祭司の屋敷までついて行ったようですが、彼らもそこまででした。最高法院での裁判と総督ピラトの官邸での裁判のとき、兵士に鞭打たれ刑場に引かれて行くとき、そしてゴルゴタの丘で十字架につけられて息を引き取られたとき、そこから取り降ろされて墓に葬られたとき、弟子たちは、そこにいませんでした。主イエスがどのようにして十字架につけられたのか、身体のどこを鞭打たれ、手のどこを釘打たれ、わき腹をどのように刺されたのか、見た者はいませんでした。

その弟子たちの真ん中に現れられたとき、主イエスは、「**あなたがたに平和があるように**」と言われながら、**手とわき腹をお見せ**になられたというのです。弟子たちには初めて見せられた、主イエスの傷跡です。

そのとき彼らは、その傷跡を、傷を受けられたお方を、初めて見たのです。自分の知っている傷跡と照合したわけではありません。医者のようにその傷に触れてみて、状態を確かめたわけでもありません。傷を受けられたお方の姿を、ただ見せられました。そして、ただ、そのお方の発する言葉を聞いたのです。そのお方が発したいと思われた言葉を、彼らは聞いたのです。「**平和があるように**」と始められた言葉を。

そのようにして、彼らは「**主を見た**」のです。

## 「指を、手を、入れてみなければ…」

最初のイースターの日、弟子たちが見たのは、手とわき腹に傷を負われた主イエスです。それは、確かに十字架につけられたことによって負われた傷であったのでしょうか。疑問の余地はないと思われます。

そのようなお方を見るために、弟子たちは、八日目にも集まりました。日曜日ごとに集まりました。わたしたちも、そうしています。

そうであればこそ、教会によっては、皆が集まる礼拝堂（聖堂）に、主イエスの磔にされた十字架を掲げるのです。十字架に手を釘付けにされたその傷と、そこで槍に突かれたわき腹の傷を、十字架に磔にされた主イエスの像は、はっきりと示してくれるのです。

けれども、わたしたちの教会は、そのような十字架を掲げてはいません。十字架は掲げても、磔にされたお方の姿は、そこに無いのです。傷を負われたお方の姿は、わたしたちの見上げる十字架の上にはありません。

そのお方は、真ん中にお立ちくださるお方だからです。十字架の上ではなく、わたしたちの真ん中にお立ちくださるお方だからです。わたしたちの見上げるどこかでなく、わたしたちのいるところの片隅のどこかでもなく、わたしたちの真ん中、ただ中に、お立ちくださるお方を、わたしたちは、見ようとしています。いいえ、今、見えています。

そのお方は、わたしたちの一人になってくださっているお方なのです。わたしたちのために十字架につけられてくださったというお方は、わたしたちのために傷を負ってくださったお方です。わたしたちの傷を負ってくださったお方、わたしたちの傷をその身に受けてくださったお方です。

トマスは、そのお方の傷を自分の目で見て、自分の指で触れて、自分の手で確かめてみなければ、「**決して信じない**」と言いました。けれども、彼は、弟子たちの真ん中に現れてくださったお方を見たとき、その傷を示されたとき、自分の指で触れて信じたものではありません。自分の手で確かめて、その傷が本物であると分かったから信じたものではありません。そこに、傷をお受けになられたお方がいらっしゃることを見て、信じたのです。

トマスは、そのお方の顔を見たのでしょうか。彼が見たのは、その傷です。傷跡だけです。傷を負い、痛みを隠せない姿をだけ、見たのです。

ここに、見える傷を、また見えない傷を、負われた方がいらっしゃいます。痛みを隠せない姿を、神の御前に晒されている方がいらっしゃいます。それは、わたしたちの傷です。わたしたちの痛みです。わたしたちは、不用意に指を伸ばしてその傷に触れたりしません。手を突っ込んで痛みを思い出させたりしません。ただ、見るのです。その傷を負い、その痛みを負ってくださっているお方、主イエスの現れを、その方の姿の中に、見ているのです。